

# 音楽科

乗 富 章 子  
今 井 直 人  
橋 本 俊 彦

## 1 音楽科における知識創造とは

人間の生活と音楽

音楽は、時には信仰や宗教活動に付随したものであったり、時には科学であったり、そして今日の音楽がほとんどそうであるように人々の楽しみの対象であったりと、太古の昔から人間の生活にいろいろな形でかかわってきた。特に楽しみを対象としての音楽は、その人の気分や興味を反映するものであり、人の心や生活を潤してくれるものである。そう考えると音楽の歴史的な発達こそ、まさに先人による知識創造の賜物といえよう。

学校教育における音楽

一方学校教育における音楽では、音や音楽とのかかわりだけでなく子ども同士のかかわりからも楽しみが生まれる。客観的な規則や事実を追求する自然科学とは違って、その子なりの感じ取り方で音楽に向き合い、楽しみ、味わう。そうしたいろいろな好みや感覚を持つ他者とのかかわりながら、自らがよりよいものを求めようとする中で、個の音楽性<sup>\*1</sup>が磨かれ、音楽的価値のより高い楽しみになるのである。

他者とのかかわりで磨かれる音楽性

\*1 感受性や表現の技能だけでなく自分がそうありたい、そうなりたいという思い

そこで、音楽科では「知識創造」を以下のように定義した。

音楽科における知識創造の定義

様々な音や音楽に出会い それらに自分なりの感じ方で向き合ったり  
かかわり合ったりする中で 自らの音楽性をより高めていこうとする営み

したがって、知識や知識のつながりが、単に階名読みや運指を教えあう、他者の演奏の感想を述べるといったことにとどまるのではない。私たちが願うことは、単に技能を高めることにとどまらない音楽性を豊かにすることなのである。

## 2 音楽科におけるかかわりの「場」をデザインするための考え方

感性の異なるものが  
かかわる「場」

音楽的な感性の共有やぶつかり合いの中で、音楽的な感覚が磨かれていくことを前に述べた。よって、かかわりの「場」は、学習集団が技能の差異のみならず、音や音楽に対する感じ取り方が異なる個の集まりであるということを肯定的にとらえてデザインされなければならない。

### (1) 音楽でかかわるといふことの意義を意識する

ア 音や音楽とかがわって美しさやよさを見出す

「子犬がじゃれているみたい」「リコーダーの音ってきれいだな」「オーケストラって迫力があるよ」というように、子どもは生活体験や音楽経験を積み重ねる中で子どもなりに音楽の美しさやよさ、楽しさ、時には難しさを知っている。しかし音や音楽といつも感覚的、受動的にかかわっているだけでは、有意味化には結びつかない。

意識的・意図的に音や音楽に向き合う

その状態の中から、ポイントを絞った練習をする、範奏や範唱から手がかりをつかむ、楽器や声の特性を知る、というような活動で音や音楽に意識的・意図的に向き合うことではじめて「こうしたら楽しいよ」「こうするともっといい音が出るよ」と意識できるようになるのである。そして自分が感じている音楽的なよさを、自分なりに理解し、自分のものとして取り込んでいくことが有意味化なのである。

補完し合うことで知識創造を導くかわり

## イ 人とかがわって楽しさやおもしろさを見出す

音楽そのものとかかわりと、他者とかかわりは、互いに補完し合うことで知識創造を導く。

例えばバッテリー奏をする、リコーダーでアンサンブルをするといった表現活動からは、他者と音を合わせるおもしろさを味わえるであろうし、鑑賞活動であれば、他者の感じ取り方を自分と比較対照することで新しい聴き方や視点を見つけることができるであろう。

そして、これも同じように、「合わせるのは楽しい」あるいは「難しい」といったあいまいで概念的なスキーマが、例えば「合わせる時はこうするとより美しくなる」と有意義化されていくのである。

ア、イともに、実際の学習活動では一人一人の演奏技能や理解力によって、有意義化の度合いにいくらかの差が生じることもまた事実である。しかし題材の構成や具体的な指導法を工夫することで、音や音楽、そして他者に対して、子どもが能動的にかかわろうとするように働きかけ、知識創造につなげたいと考える。

## (2) 知識創造を導く三つの場と評価を意識する

### 知識創造のプロセス

\*2 研究紀要第58・59集でスパイラルにつながる3つの活動過程として設定した

### つかむ場と引き出す活動

### もとめる場と生み出す活動

### ひろげる場とふり返る活動

### ア 活動と知識創造の三つのプロセス

音楽科では知識創造のプロセスとしての「かかわりの場」を、音楽科において従来から設定してきた\*2「つかむ→もとめる→ひろげる」という三つの活動過程と関連づけてとらえている。

まず学習のはじめに子どもがその音や音楽に素直に向き合い、意欲や興味を喚起する「つかむ場」において中心となるのが引き出す活動である。ここでは、魅力ある素材を用意する、曲との出会いの仕方を工夫する、学習課題を明解なものにするといった手だてによって、そのあとの活動が主体的・能動的なものになるようにしたい。

そうして感受したことをもとに課題に向き合う「もとめる場」では、他者の表現の仕方や感じ取り方とかかわる。それらと比較したり共感したりすることで学習課題をより確かに、自分のものとしてとらえ、音楽性を高めていくという生み出す活動が営まれる。

音楽科ではふり返る活動が単なるまとめや収束となることは望ましくない。それを「ひろげる場」ととらえ、音楽を楽しみ、新たな課題やあとに続く学習への意欲に結びつけたい。そのためには音や音楽とかかわり、他者とかかわることで高まった音楽性を、互いに肯定的に受け入れながら交流できるような活動を工夫したい。

### イ 音楽科の知識創造と評価

音楽科における知識創造が、単純に音楽的知識や表現技能を身につけるものではないことはここまでに述べたとおりである。したがって、練習すれば解決できることを「できるーできない」の尺度で評価しても、音楽性を高め感性を磨くことにはならない。また感受したことを書かせても、言葉の表現力という音楽性とは別の要素が加わることがしばしばある。

そこで、音楽に向き合う子どもの反応を即応的にとらえて言葉かけをしたり、他者の音や感じ取り方、考え方に反応する姿を観察したりするような、かかわりを意識した評価を大切にしていきたい。

そのような評価によってこそ、個の音楽性の高まりだけでなく、学習集団の音楽性の高まりも期待できると考えるからである。

子どもの反応する姿を評価して 集団の音楽性の高まりにつなげる

### 3 実践例 —2年—

#### (1) 題材名 気持ちや様子を音で表現しよう ～なんて鳴いてるの？～

#### (2) 本題材における知識創造

かえるの鳴き声を工夫して表現することで 気持ちや様子に合った歌声や表情に気づくことができる

子どもは、4月に楽曲「おたまじゃくしは…」(武鹿悦子作詞、寺岡悦子作曲)に出会い、5月のふじだなおとぎ会で発表をしたこともあり、校庭の池にいるおたまじゃくしの成長を毎日楽しそうに観察している。おたまじゃくしに口があること、かわいい目を見つけたこと、足が出てきたことなど、キラキラと目をかがやかせて、大声で喜ぶ子どもにとって、おたまじゃくしやかえるは一番身近な生き物であろう。また、同曲に「しっぽをちりちりふりました」など、おたまじゃくしの動きを音で表現するフレーズがあり、池のおたまじゃくしのしっぽを注意深く観察して、「本当にちりちり動かしているよ」と、あちこちで手をしっぽに見立てて動かしながら歌う姿が見られた。

かえるを題材とした教材曲「かえるのがっしょう」(岡本敏明作詞、ドイツ曲)は、教科書教材として紹介される前から、子どもによく知られている。しかし、「かえるのうたがきこえてくるよ」という歌詞があるが、実際にはどんな歌かは示されていない。「クワッ、クワッ、クワッ…」の鳴き声に想像力をふくらませる余地が広い楽曲という見方ができる。

本題材では、四分音符と四分休符の音やリズムに注意深くなる態度を育てるために、鳴き声という音に気持ちを込めて表現することを楽しむ。しかし、うれしいや悲しいなどのかえるの気持ちを鳴き声で表現することは、日本語の歌詞(言葉)をそのまま伝えるよりも難しい。歌う表情や音の大きさ、声の出し方、歌うときの曲の速さなど、様々な工夫が求められる。今まで学んできたことをもとにしながら、これらの視点を少しずつ意識してとらえ表現することで、音楽性が高まっていくであろう。

また、友達の表現を見て聴いて、かかわり合う中で、多様な表現の存在に気づくであろう。同じように表現したとしても、そこには解釈の違いが生じることがある。自分と友達の表現をくらべ、友達の表現や言葉がけを手がかりにして、表現を高め合える場としたい。そのためには、表現したい気持ちにふさわしい表情で歌っているかという視点を持ちながら互いに表現し合ったり、友達のいいところを見つけ合ったりすることで、ともに音楽を楽しむかかわり合いを持たせたい。表現したり鑑賞したりする活動を通して、音そのものや発言から、互いに知識創造がなされるであろう。

#### (3) 知識創造を育むために

##### ① 本題材におけるかかわりの「場」のデザイン

##### ア 音に表情をつける楽しさを味わう場

音に表情があることを知り、自分たちも表情や歌い方などを工夫することで、音に変化をつけることができる楽しさを味わわせたい。楽曲は、表現者の意図で様々な変わるものであるために、表現者はその曲にふさわしいと思う表現の仕方を意識する。そこで、本題材では、かえるがどんな気持ちや様子なのかを意識しながら表現を工夫する場の設定を通して、いろいろな表情のかえるの鳴き声があることを理解し、曲全体のイメージが変化していくことを感じ取らせたい。例えば、楽しい気持ちを音で表現する場合には、今までの生活経験をもとに、楽しいとはどんな感じかを想起するであろう。しかし、楽しいから自然に笑顔と歓声が出たという通常のプロセスとは逆に、一人一人が楽しい様子を具体的にイメージすることで、楽曲の中のかえるが楽しそうに歌っているような表現につなげていきたい。

また、子どもの発想を最大限に生かすことを考えて、強く息を出して歌うことで歌詞の鳴き声が違って聞こえたり、テンポがゆっくりになったりということも認めて取り上げ、広めていきたい。

さらに、これらの場を支えるためには、子どもが歌いやすい音域であることが求められる。そこで、教科書にはハ長調で表記されて教材曲を、子どもの実態に合わせて移調し、音のひびきを感じながら歌えるようにしたい。

##### イ 互いの表現を認め合う場

自分の思いを音で存分に表現するためにも、それを表出できる場を保障しなければならない。そこで、

互いの意見を自由に出し合い、表現し合える雰囲気大切にするために、活動する単位を生活グループと同一に設定した。グループごとに楽しくかかわり合いながら一つの表現をつくりあげていく過程で、発想や表現の多様さに気づいたり、みんなで表現する楽しさを感じ取ったりすることができるであろう。

また、表現しようとする気持ちや様子を相談することだけでも時間を要するために、教師があらかじめグループの数だけのかえるの気持ちを決めてカード化する。子どもは、グループごとにカードを選び、そこに書かれた内容を表現する活動を行う。その際、グループごとの表現内容を同一にすることで、自分たちのグループとの比較が行えるわけではあるが、今回はあえて表現内容をグループによって変えることで、どのグループの表現も工夫されていたと素直に認め合える場としたい。それにより、他のグループの模倣ではなく、自分たちのグループだけの表現に集中できると考えたと考えた。そして、発表し合う場では、単に評価し合うのではなく、音楽的な表現に共通する要素（歌い方、表情など）に関連した工夫に注目させた聴き方としたい。

## ② かかわりの「場」を支える長期的な取り組み

音を感じて、自然に身体も動き出している子どもがいる反面、恥ずかしさからか、自己表出に戸惑いを見せる子どもも多い。音を表現する楽しさを感じ取り、自分も表現したいという気持ちを高めるために、例えば、「みんな、Aさんの歌声の響きを聴いてみて」「Bさんの歌っているときの顔が素敵だったから、みんなに紹介してほしいな」「Cさんの手拍子は、はずむようにかっこよくたたいてるよ」など、音楽的な観点から、すべての子どもが認めてもらえるような場を設定し、全員が表現する喜びを味わえるように取り組んでいる。そこには、「わたしも、できるようになったよ」という高まり合いの姿が見られている。そして、自分ができるようになったことを増やし、苦手だと感じている領域（歌唱、器楽など）にまで、意欲的に取りくもうとする態度を育てている。また、録画・録音した自分たちの表現を鑑賞する場を設定することで、より客観的な視点で音楽表現をとらえられるようにしている。

### (4) 題材計画（総時数3時間）

主な活動と内容	かかわりの「場」のデザインと教師の意図
<p>1. 「かえるのがっしょう」を演奏する  <b>音符か休符かを意識して演奏しよう</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>鍵盤ハーモニカの演奏で 息をすばやく止めないと 休みのところ（休符）で音が出てしまうよ</li> <li>伴奏を聞かないで弾くと だんだん速くなっていくよ</li> <li>音の高さを高くして歌うと歌いやすくなったよ</li> <li>高い音で歌うと かわいいかえるのような感じがするよ</li> </ul>	<p>○ <b>旋律を正しく把握してみんなで表現する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>楽曲のリズム（音符タンと休符ウン）を息のコントロールによって正確にとらえさせるために、鍵盤ハーモニカを用いて旋律を演奏させる。</li> <li>自分に歌いやすい音の高さがあることを感じるために、二長調、ホ長調、へ長調と移調して表現することで音程を意識させる。</li> </ul>
<p>2. かえるの気持ちや様子を考えながら歌う  <b>かえるの気持ちや様子をうたであらわそう！</b>  <b>鳴き方を工夫して表現しよう</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>（うれしい気持ちは）うれしかったことを思い出して歌うと歌いやすいよ</li> <li>楽しい気持ちのかえるなので 歌っているときの顔も もっと楽しそうに笑って歌ったらいいいと思います</li> <li>△さんの歌い方が良かったので みんなでまねをしたらいいと思います</li> </ul> <p><b>工夫した気持ちや様子を発表しよう</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>楽しい気持ちや様子が歌や動きで伝わってきました</li> <li>○○さんの表情が かえるのうれしさを表していました</li> </ul>	<p>○ <b>表す内容をもとに表現を工夫する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>鳴き声を工夫する場を、日常のかかわり合いの延長上の生活グループごとに設定することで、自由な発想で表現を工夫できるようさせたい。</li> <li>グループ内で、交互に表現し合う中で、気づいたことを伝え共有する姿を認め広げる。</li> </ul> <p>○ <b>気持ちや様子を音で伝え合い表現し合う</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>視点をもって聴くことができるように、何がよかったから、気持ちや様子が伝わったのかを音楽的な要素とかかわって鑑賞することのよさを広める。</li> <li>表現の仕方が、似ているけど違うという姿に着目して、いろいろな表現の工夫があることを互いに認め合う。</li> </ul>

## (5) 授業の実際と考察

ここでは、かえるの鳴き声を工夫して表現する活動を展開した第二次中の2時（以下、本時とする）を中心に考察を行うこととする。

本時におけるめざす知識創造は、「かえるの鳴き声に気持ちを込めて表現する活動を通して、様子が変わると顔の表情や歌い方も変わることに気づくことができる」であった。怒ったかえるやねむそうなかえるなど、グループそれぞれに違う表現内容について、どうすればその気持ちを表せるかを話し合いながら表現の工夫を進める。その後、これらを互いに発表し合うことで、同じ楽曲「かえるのがっしょ」が、意図する気持ちによって変化する様子を感じ取ることができる。その知識創造を音楽科における知識創造の定義に基づいて、さらに具現化したものが次の二点である。

### 【本時におけるめざす知識創造】

#### ① 既知を楽曲に反映することができる

日頃、子どもは、感情を意図的に表現しているわけではなく、状況に即して自然に表現している。ここでは、かえるの気持ちを表すために、音楽的な既知や生活経験をもとに表情や音を工夫する。

#### ② 多様な表現を味わうことができる

グループごとに工夫して表現する活動を取り入れたり、グループごとの表現を鑑賞し合ったりすることで、個々の発想や感じ方が多様であることに気づく。また、同一楽曲が表現者の意図によって、さまざまに変わることを感じる。

①は、音楽科における知識創造の定義「音楽に自分なりの感じ方で向き合いながら自らの音楽性を高めていこうとする営み」に相当するものである。音楽そのものに意図的に向き合い、それを感じ取ることにより、自らの音楽性を高められるというとらえ方である。

②は、定義「子どもが互いにかかわりながら音楽性を高めていこうとする営み」に当たるものである。一人では気づくことができないことでも、友達の表現を見たり聴いたりする中で、また、友達と考えを出し合う中で、有意味化できるというとらえ方である。

以下に、本時でめざした二つの知識創造について、かかわりの場のデザインと子どもの意識をもとに考察する。

#### ① 既知を楽曲に反映することができる

歌詞を間違えずにリズムや音程を正しく歌うだけではなく、曲想を工夫することを求めた。そのために、生み出す活動では、顔の表情や動きという平易でわかりやすい工夫から取り組みはじめ、結果として、ふさわしい声色や息の強さなども工夫されていくという場を設定した。例えば、悲しんでいるかえるを表現するときに、悲しそうな顔つきで歌うことによって、悲しい鳴き声を表現できるととらえたからである。自分の心情を曲想に合わせて変化させることは音楽的に高度なことであるが、実際にはかえるになりきって演じているという意識で、抵抗なく取り組んでいた。実際に、身体表現に伴って、自然と息の強さや流し方などの工夫できていた子どもが多くいた。

音楽的な表現力の向上をめざすのであれば、教師は子どもができていく音楽表現上の工夫を、音楽的な視点をもって即応的に評価することが大切であった。また、身体表現の工夫が楽しく、大半の時間を費やした子どもには、身体表現よりも音を工夫することを求めていることを感覚的に気づかせることが必要であった。

#### ② 多様な表現を味わうことができる

ここでは、グループを中心とした人とのかかわりの中で、活動ごとにふり返る。

引き出す活動では、かえるの鳴きまねやかえるになって動き回ることを求めるのではなく、リズムや音程を正確に表現することを求めて、それができている子どもを全体に紹介し、何がよいかに気づかせる場を設定した。はじめは歌っているときの顔の表情に関する感想が多くあったが、徐々に音楽的な視点をもって評価する子どもが増えてきた。「ウン（四分休符）をしっかり休まないよ、どんどん（テンポが）速くなっていくよ」という子どもの発言からは、リズムとテンポを関連してとらえていることが見て取れた。再度みんなで歌う場では、鍵盤ハーモニカでの演奏で学習した四分音符と四分休符の繰り返されるリズムや息の流し方を意識して、より表情豊かに歌う姿が見られた。

生み出す活動では、より表現しやすい環境を求めて、生活グループでの活動を組み入れた。その結果として、思ったことや感じたことを出し合う雰囲気（写真1）は十分であった。表現するかえるの気持ちや様子になりきって、身体全体で音楽を感じながら、息の強さや声の大きさ、中には調子やテンポを変えるグループもあった。しかしながら、身体表現にこだわり続けたグループもあり、教師の即応的なデザインによって、活動の途中であっても、より音楽的な工夫ができていくグループを全体の場で広め認めることで、音楽的な表現に力点を置く活動に注目させるべきであったと考える。



写真1 グループでアドバイスし合う姿

ふり返る活動では、「ゆっくりとした速さで、ふわふわとした声で歌っていたので、ねむたいかえるの様子がよくわかりました。」という子どものふりかえりのように、友達の表現を鑑賞することによって、何を工夫したらどのように変化したのかを結びつけて理解することができたようである。しかし、急いでいるかえるを担当したグループの表現を鑑賞して「急いでいるのに、手や体はあまり動いていなかった。だけど、急いでいる様子がとても伝わってきました。」とふり返る子どももいた。楽曲のテンポを速くしてリズムを増したり、歌うときの息のスピードをすばやくしたりというグループの音楽的な工夫に対して、聴き手は視覚的なとらえで聴いていたにもかかわらず、急いでいる様子がとても伝わってきたと感じているわけである。聴き手の心には伝わったものの、音楽的な要素と関連づけて理解するまでには至らなかったということである。これは、各グループの音楽的な要素に関する工夫（楽曲のテンポや調子、息の出し方、声の大きさなど）をカテゴリーごとに整理してとらえるための十分な時間が不足していたためであろう。どのグループがどんな視点でどのように工夫したのかを、自分たちのグループと比較することで、音楽的な要素が曲想に及ぼす影響の大きさを体感し、他の楽曲への応用可能なスキーマとなったであろうことを考えると、時間配分への配慮が必要であった。

## (6) 成果と今後の課題

活動を進めるにあたっては、自分の表現したいものが、相手にどのように受け止めてもらえるかという客観的な見方が必要であるために、グループでの活動を中心に設定した。自己満足ではなく表現内容が聴き手に伝わったかを大切にすることから、相手意識をもって表現することができた。実際にグループでは、小さな表現発表会が連続して行われているかのような感覚で、交互に表現して感想を出し合い、自然と相手意識を持ちながら活動を続けていたことは、子どもの様子から見てとれた。そして、何を工夫すればかえるの気持ちの表現に相当するかをとらえて、全体に発表するときも、後述の視点を除けば、他のグループに表現内容が伝わるのか不安に感じている様子はなく、自信をもって表現することを楽しむことができ、聴き手の感想から相手に理解されたことで、うれしそうにする姿が見られた。

本時は、かえるの鳴き声という簡単な音を楽しく歌うだけにとどまらず、新たな分析を加えて表現する活動を求めた。子どもにとっては、かえるの鳴き声に気持ちがあるとか、かえるそのものに心情があるという感覚はなかった。自らの生活経験をもとに、かえるになりきって、自分なりに表現を工夫していくうちに、表現したいかえるの気持ちを表すことができた満足感を得ている。

しかし、音楽的に十分高まったかという視点から考察すれば多くの課題が残る。グループ活動では、終始子どもの自主性に委ね、教師の机間巡視による言葉掛けが有効ではなかったために、表情や動きの工夫ばかりを楽しむグループや、工夫するための話し合いに多くの時間を費やすグループなどが見られた。教師は、グループ活動に取りかかりやすいように、幅広い視点からの工夫を認める活動を求めたのであれば、その様子を見取りながら、より音楽的な工夫にしぼった活動が展開できるように、活動の途中で、新たな場のデザインの設定や即応的な対応をする必要があった。そうすれば、他のグループの発表を聴くときも、楽しそうに興味を持って鑑賞するだけではなく、自分たちの表現との比較や、グループ間の聴き比べによって気づきが増えたのではないだろうか。

楽しく表現し合う活動の中で、より具体的に音楽的な要素と関連づけた活動の場を工夫することで、子どもの音楽性を高めていきたい。